翻訳通訳クラス履修学生の訳出に見る『脱言語化』の影響

関口　智子

Effects of “Deverbalization” on the Students’ Output in Interpretation Classes

SEKIGUCHI Tomoko

Danica Seleskovitch, a prominent conference interpreter and a leading scholar in Interpretation Studies, established a translation theory in 1968. In her theory, she postulated “deverbalization” in the process of interpreting, which is indispensable to access the intended meaning of utterances. This paper begins with an overview of her theory, which claims that translation is not a work on words or languages, but on message or sense. Next, it examines the effects of “deverbalization” on the students’ output in English-Japanese interpretation classes. A marked difference was observed in the quality of their translation between before and after the initiation of “deverbalization.” Lastly, this paper points out several obstacles to overcome for students to translate smoothly along with the process of “deverbalization.”

１．はじめに

「通訳とは、言葉を置き換えるのではなく、意味を伝えるものだ。」これは、1968年、ダニッツァ・セレスコヴィッチ（Danica Seleskovitch）[i]が、「意味の理論」[ii]で提唱した主張である。通訳というと、「言葉を訳す」、つまり、縦のものを横にするように、Ａ言語の言葉をＢ言語の言葉に訳すと考えられがちである。しかし、「意味の理論」は、通訳は言葉ではなく話し手の伝えようとする意味（メッセージ）を捉え、それを通訳者自身の言葉で表現するという基本的理念を提示した。以後欧米では会議通訳者を志す人の必読書となっており、通訳翻訳関係の書籍の中でも古典として広く知られている。

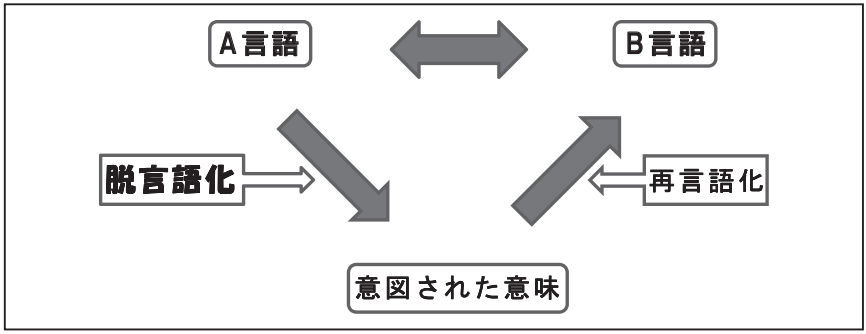
話し者・書き手によって「意図された意味」を聞き手・読み手である通訳者翻訳者が理解するプロセスは、この理論では「脱言語化／非言語化[iii]（deverbalization）」と呼ばれている。友野（2012）によれば、このプロセスは通訳翻訳の学習と経験によって、ほぼ自動的に処理できるようになるとされている。本稿では、『脱言語化』の意識付けによって、通訳翻訳学習者の訳出にどのような影響がもたらされるのかを観察する。

２．『脱言語化』とは

「意味の理論」は、通訳プロセスに関する研究であるが、「言語の理解 ⇒ 変換 ⇒ 訳出」という過程においては、翻訳も共通である。通訳と翻訳の主たる違いは、言語媒体であることから（前者は音声、後者は文字）、本稿ではこの理論は通訳翻訳に共通の理論と見なす。実際に、「意味の理論」は通訳翻訳研究の基礎的理論として導入され、通訳者および翻訳者のバイブルともなっている。友野（2012）は、「意味の理論」の通訳プロセスは次の３段階から構成されていると述べている。

① スピーチの言語的意味を構成する様々な要素を言語外の知識と融合させて、スピーカーによって「意図された意味」（sense）を得る。
②「意図された意味」が生じると同時にそれを『脱言語化』（deverbalize）する。
③ ②の「意図された意味」を自発的に訳出言語で表現する。

このプロセスは、以下のように図示することができる[iv]。



「意味の理論」によれば、通訳とは、言葉の表面的な置き換えではなく、より深いレベルで意味を伝達することだと主張されている。通訳は表面的なインプットとしての語句を単純に聞きとるのではなく、その背景にあるメッセージを瞬時に読みとる作業とされる。上の図に示されている「A言語」と「B言語」間の左右の矢印⟺に示される工程では、両言語間での表面的な単語の置き換えに終わってしまう。「意図された意味」に到達するには、発話をいったんA言語から切り離して捉える、つまり『脱言語化』する必要がある。発話の「意図された意味」を捉えたら、それをB言語で再び言語化し表現するのである。

松下（2021）は、例として英語の “game” という語の解釈を挙げている。これを、『脱言語化』のプロセスを経ず、「ゲーム」と訳すと、場合によっては「意図された意味」を伝えられないことがある。動作を行っているのが子供であれば「遊び」、スポーツの文脈ならば「試合」や「競技」、または誰かの誘いに “I'm game” と答えたのであれば、「僕もやるよ」「参加します」などの訳が相応しいであろう。発話者によって「意図された意味」を得るには、言語外の様々な要素や知識を融合させなければならない。

３．翻訳通訳クラスの実践例

３．１　手法

ここでは、翻訳通訳クラス履修学生（合計11名）が、『脱言語化』について学ぶ前と後を比較し、実際に訳出にどのような影響がもたらされたか、また学生の意識にどのような変化が見られたかについて考察する。今回は、英語から日本語への訳出に焦点を当て、訳出媒体は文字とする。

まず、クラスの指定テキストの『通訳学101～理論から実践まで～』（2012）からDonald Keene氏の日本文学者としての生涯に関する英文のパッセージ “Donald Keene and Japan” を翻訳させた。これをプレ『脱言語化』（『脱言語化』を意識しない訳出）と呼ぶことにする。次に、授業で、同テキスト第５章「通訳のモデル」で取り扱われているダニッツァ・セレスコヴィッチの「意味の理論」について概観した。学生に翻訳通訳プロセスにおける『脱言語化』の果たす役割を理解させ、『脱言語化』を経ている訳と『脱言語化』を経ていない訳を比較させた。また、英語のドラマ、映画などの素材から、『脱言語化』を経ている訳例を集めさせ、自然な訳出に至るためには不可欠なプロセスであることを実感させた。その後、前出の英文パッセージを『脱言語化』を念頭に

置いて再度訳出させた。これをポスト『脱言語化』（『脱言語化』を意識した訳出）と呼ぶことにする。

３．２　訳出の比較

以下に、プレ『脱言語化』の訳出とポスト『脱言語化』の訳出から、19例を紹介する。２つの訳出の比較により、ポスト『脱言語化』の訳出に見られる特徴は以下の３つに分類できる。

A．直訳からの脱却
B．洗練された日本語表現
C．背景知識に基づく補足

以下に、それぞれ具体例を考察していく。

A．直訳からの脱却

	英語原文	プレ『脱言語化』	ポスト『脱言語化』
1．	in order to **become a Japanese citizen**	**日本国民になる**ために	**日本人に帰化する**ために
2．	“**It may be my last trip to Japan in my life**.”	「**これが最後の日本への旅行になるだろう**。」	「**日本に永住することになるだろう**。」
3．	For **young** Keene,	**若いころの**キーンにとって	**青年の**キーンにとって
4．	he **selected** a book titled “The Tale of Genji”	「源氏物語」という本を**選び**	「源氏物語」という題名の本を**手に取り**
5．	he selected a book titled “The Tale of Genji” **and began to read** about life in 11th-century Japan.	「源氏物語」を手に取って、11世紀の日本について**読みました**。	「源氏物語」を手に取り、**立ち読みを始めました**。11世紀の日本の生活様式に引き込まれて行ったのです。
6．	his **life-long journey** as a scholar in Japanese literature	日本文学者としての**長い旅**	**生涯をかけた**日本文学者としての**旅路**
7．	Keene **joined** the U.S. Navy	アメリカ陸軍に**加わりました**。	アメリカ陸軍に**入隊しました**。

8.	He found the job particularly **uninteresting**	その仕事は特に**おもしろくありませんでした**。	その仕事に特に**やりがいを感じていませんでした**。
9.	little **hand written books**	**手書きの本**	**手記**
10.	At first, he **had no idea** what **the miniature books** were	最初は、この小さい**本**を**理解できませんでした**。	最初は、この小さい**手帳**が何なのか**見当もつきませんでした**。
11.	(Many of the last written thoughts of these soldiers) **described** their desire to …	多くの日本兵の願いが**書かれていました**。	多くの日本兵が最後に**書き残した**のは、…という願いでした。
12.	Keene **went to Japan for study**	キーンは**留学のために日本へ行き**、	キーンは**日本に留学し**、
13.	He is generally regarded **the top scholar of Japanese literature**.	**日本文学者のトップ**とみなされています。	**日本文学の第一人者**とみなされています。
14.	the Japanese people **have treated me with amazing kindness**	日本の人たちは**驚くべき（絶大な）優しさで対応してくれました**。	日本の人々には**とてもよくしていただきました**。

上の表に見られるように、ポスト『脱言語化』では直訳、文字通りの逐語訳ではなく、状況に即したより自然な訳に仕上がっている。例えば、4の動詞selectは、直訳の（本を）「選ぶ」より（本を）「手に取る」が、この文脈ではより自然な訳出であろう。また、6の“life-long journey”の訳出であるが、プレでは「長い旅」と不完全な直訳になっているが、ポストでは「生涯をかけた旅路」と life-long の持つニュアンスを的確に表現している。14 の“with amazing kindness”は、プレでは「驚くべき優しさで」や「絶大な優しさで」と逐次訳されていたが、ポストでは「意図された意味」が汲み取られ、“have treated me with amazing kindness”全体で「とてもよくしていただいた」という自然な日本語訳に至っている。

その他、1の“become a Japanese citizen”を「日本国民になる」から「日本人に帰化する」、3の“young Keene”を「若いころのキーン」から「青年のキーン」、8の“uninteresting”を「おもしろくない」から「やりがいを感じない」、9の“hand written books”を「手書きの本」から「手記」、10 の

“had no idea”を「理解できなかった」から「見当もつかなかった」、12 の“went to Japan for study”を「留学のために日本に行った」から「日本に留学した」、13 の“the top scholar”を「（日本文学者の）トップ」から「（日本文学の）第一人者」など、単語の表層的な意味ではなく、状況や文脈を考慮したナチュラルな表現に変更され、訳の質が向上していることがわかる。

B．洗練された日本語表現

	英語原文	プレ『脱言語化』	ポスト『脱言語化』
1．	**he announced that**（he would be leaving the U.S.) in order to **spend the rest of his life in Japan**	（アメリカを去り）**日本国民になることを告げました**。	（アメリカを去り）**日本で余生を過ごすと発表しました**。
2．	What he discovered was **a world of indescribable beauty that he knew nothing about**	その本の中には**見たことのない説明できないほど美しい世界**が広がっていたのです。	そこで彼は**思いもしなかった説明しがたい美しさに満ちた世界**を発見したのです。
3．	（When asked）**what made him decide** to become a Japanese citizen	日本人に帰化しようと決断した**きっかけ**は何だったのか（尋ねられた時）	日本人に帰化しようと決断した**決め手**は何だったのか（尋ねられた時）

次に、ポストにおける洗練された日本語表現の使用例を紹介する。１の“spend the rest of his life in Japan”は、プレでは「日本国民になる」と「意図された意味」は汲み取ったものの、表現が単純化されてしまっている。それに対し、ポストでは、逐次的ではあるが「日本で余生を過ごす」という洗練された表現を用いることによって、本来の英語表現の持つ味わいが表現されている。また、announced は「告げた」より、この場合はコロンビア大学の彼の最後の講義での announce であったので、「発表した」と訳す方が適切であろう。

２では、“he knew nothing about”をプレでは「見たことのない」、ポストでは「思いもしなかった」、“a world of indescribable beauty”をプレでは「説明できないほど美しい世界」、ポストでは「説明しがたい美しさに満ちた世界」と、微妙ではあるが、より洗練された語彙を使用することによって、この文脈の優雅さをうまく表現している。３の“what made him decide”は、国籍を変更するという一世一代の決心であるので、「きっかけ」より重みのある「決め手」の方が相応しいであろう。

C．背景知識に基づく補足

	英語原文	プレ『脱言語化』	ポスト『脱言語化』
1．	(Since many foreigners were actually leaving Japan) especially after the **3/11 earthquake** and tsunami and **the subsequent radiation from the damaged nuclear reactor**.	**3.11と原発事故**により(多くの人が離れました。)	**東日本大震災、**津波、**その影響で起きた福島第一原発事故による放射能漏れ**を受け、(日本から出国していたからです。)
2．	as narrated by **a court lady** a millennium earlier	平安時代の**女官**が語る	平安時代を生きた**紫式部**が織りなす

最後に、背景知識に基づき、情報を補足したり、原文より具体的な表現を使用している訳例を紹介する。まず、1の“3/11 earthquake”は、プレでは「3.11」と簡素化されているが、ポストでは「東日本大震災」という具体的な名称に置き換えられている。“the subsequent radiation from the damaged nuclear reactor”に関しても、プレでは「原発事故」と不完全な訳出に留まっているが、ポストでは、「その影響で起きた福島第一原発事故による放射能漏れ」と、原発事故が発生した発電所名を追加するなど情報を補足している。2の“a court lady”は、文脈上、「源氏物語」を執筆した女官を指すので、ポストでは「紫式部」という固有名詞を使用している。また、プレでもポストでも“a millennium earlier”という英語表現に対し、「1000年前」と直訳する代わりに、「平安時代」という固有名詞を使用しており、さらにポストでは「平安時代を生きた」と流れのある訳に工夫されている。動詞 narrate は、プレでは「語る」と訳されていたが、ポストでは「織りなす」という情感豊かな表現に変更されている。

3.3　学生の意識変化

最後に、『脱言語化』の体験を通した学生の意識変化を把握するために、アンケートを実施した。プレ『脱言語化』とポスト『脱言語化』の訳を比較し気づいたこと、『脱言語化』のプロセスについて感じたことを自由記述してもらった。以下に、学生のコメントの一部を紹介する。

学生たちは、総体的に『脱言語化』を意識する前の訳は、若干違和感があり、メッセージが伝わりにくいと評価していた。その後、『脱言語化』というプロ

セスを挿むことによって、問題箇所が自然でわかりやすい訳に改良されていることを実感している。学生たちからは、概ね翻訳通訳プロセスにおける『脱言語化』の重要性を実感したというコメントが得られた。

学生Ａ：『脱言語化』にあたって、前後の文脈を踏まえつつ訳出することが重要であると身をもって感じた。

学生Ｂ：直訳するのではなく、まずは文章が何を伝えたいのかをじっくり考えてから、読み手・聞き手にもわかりやすい訳出をすることが大切さだと学んだ。

学生Ｃ：通訳翻訳に関わらず『脱言語化』によって、原文が意味するところを汲み取り、より伝わりやすく、より美しい訳し方を模索できた。

学生Ｄ：言いたいことの核を捉えて、普段使っているナチュラルな日本語を選択する必要性があると改めて感じた。

学生Ｅ：『脱言語化』を意識すると、より話の内容や場面をイメージしやすくなり、違和感のない訳出ができると感じた。

学生Ｆ：原文からわかる状況を最大限想像し、それを言語化する能力が重要だと感じた。

学生Ｇは、「通訳に一番必要なことは言語を他の言語に変換することではなく、スピーカーが伝えたいことを他の者に伝えることであることを改めて実感した」と感想を述べた。具体的には前述の “It may be my last trip to Japan in my life” の訳出に関して、「これが最後の日本への旅行になるだろう」という逐次訳でも言いたいことは伝わるが、わかりやすさを重視し「日本に永住することになるだろう」という訳を選んだと言う。

学生Hは、『脱言語化』を意識して訳すことで、プレと比べて、より自然で内容が頭に入ってきやすい訳になったと言う。例えば、“radiation from the damaged nuclear” は2011年の震災が背景にあり、逐語的に「損壊した原子炉からの放射能」と訳すより、「原発事故」と訳した方が適切であると判断した。

また、“he selected a book” の “select” を「選ぶ」ではなく、『脱言語化』して「手に取る」という訳語を使うと、書店にいる臨場感が表現できると感じたと言う。この同じ学生は、“he found the job particularly uninteresting” の “uninteresting” をプレでは「つまらない」や「退屈」と直訳していたが、『脱言語化』を経て「やりがいがない」と訳すことで、より仕事の質に言及している感じが伝わるように感じたと語る。

学生Ｉは、ポストでは少し順番を入れ替えたり、大きく表現を変えたりすることで、わかりやすさを追求したと言う。例えば、“the 3/11 earthquake” は日本人がこの訳文を読むということを踏まえ、不要な情報は削り落とし、「東日本大震災」という固有名詞に置き換えたと言う。また、書店のシーンでは、キーンが「源氏物語」を手に取って読み感動したという状況を想像し、あえて「立ち読み」と言う表現を選んだと言う。

4. おわりに

本稿では、翻訳通訳クラスにおける『脱言語化』の意識化の意義について考察した。短期間ではあるが、意識付けをすることで、学生の訳に大きな違いをもたらすことが観察された。しかし、学生がスムーズに『脱言語化』を行うにあたり、いくつかの障害も明らかになった。一部の学生は、「何が言いたいのかはわかるが、日本語にうまく訳出できない箇所があった」と述懐している。つまり、『脱言語化』はできても、その後の「再言語化」、つまり英日の翻訳通訳の場合は、「意図された意味」の日本語での再表現に苦労しているのである。これを克服するには、豊富な日本語語彙力が不可欠であり、学生もそれを痛感している。英日（日英）翻訳通訳クラスでは、英語の語彙力だけでなく、母語である日本語の語彙力も増強する必要性を改めて痛感した。

また、ある学生は、直訳することに慣れてしまっているためか、意外と『脱言語化』できる部分が少なく意識しないと見逃してしまうとコメントしていた。「意図された意味」を読み取り、再言語化することに予想以上に時間がかかったと振り返っている。直訳する習慣から脱却し、『脱言語化』と「再言語化」をスムーズに行えるようにするには、意識的な継続的な練習が必要であろう。

最後に、『脱言語化』のプロセスに関して、翻訳では可能であるが通訳では難しいという見解が多く見られた。今回は、文字媒体による訳出、つまり翻訳に近い形で『脱言語化』を試みたので、学生は対応可能だったのではないかということである。翻訳の場合は、何度も原文を読み返し、文章全体を把握して

から『脱言語化』できるが、通訳は初めから文章全体を把握できるわけではないので、『脱言語化』して訳すのはハードルが高いと感じているようである。ある学生は同時通訳を授業内で実践した経験から、日本語に単語レベルで変換するのも難しいのに、瞬時に『脱言語化』を行うのはプロでもかなり厳しいのではとコメントしている。確かに、前述のように『脱言語化』というプロセスがほぼ自動的に処理できるようになるには、長い訓練と経験が必要である。そこで、大学の翻訳通訳クラスでは、『脱言語化』の導入にあたっては、内容を予測しながら聞きスピーディーに対応しなければならない通訳より、時間をかけてじっくり考えながら作業できる翻訳で、意識化を図った方が効果的また現実的であると言えるであろう。

参考文献

セレスコヴィッチ・ダニッツア（著）、ベルジュロ伊藤宏美（訳）『会議通訳者：国際会議における通訳者』2009. 研究社

友野百枝、宮本友之、南津佳広『通訳学101～理論から実践まで～』2012. 大阪教育図書

松下佳代　通訳翻訳研究の世界～通訳研究編～「意味の理論」を考える
https://www.japan-interpreters.org/news/ti-research3/, retrieved on Sep.1, 2021

注

i　セレスコヴィッチ は、フランス語を母語とする複数言語（独、英、セルボ・クロアチア語）の卓越した会議通訳であった。その後、パリ第三大学（ソルボンヌ大学）通訳翻訳高等学院（ESIT）で「翻訳学」を研究分野として確立し、世界各地から集まった研究者の指導に当たった。ESITの通訳科では、通訳理論の講義および実技指導も担当し、1982年にはESITの学長に就任した。

ii　「意味の理論」は、1968年の著作 *L'interprète dans les conférences internationales: problèmes de langague et de communication*（Chaiers Champollion）で発表された。英訳は、1978年に *Interpreting for International Conferences: Problems of Language and Communication*（Pen & Booth, revised edition 1994）として出版されている。

iii　“Deverbalization” は、『非言語化』または『脱言語化』と訳されるが、『非言語化』は複数の意味を持ちうるため、本稿では『脱言語化』を使用する。

iv　『脱言語化』のプロセスを経て「意図される意味」を捉えてから、翻訳通訳するためには再び言語化してアウトプットする必要がある。本稿では、そのプロセスを図の中で『再言語化』と呼んでいる。